

戸川猪佐武

和玉部保守新流

小説吉田学校



小説吉田学校 (第5部) 保守新流

昭和52年 2月15日 初版発行

昭和54年 3月31日 2刷発行

著 者 戸 川 猪 佐 武

発行者 小 山 敦 彦

発行所 流動出版(株) 東京都港区愛宕 1-2-2 (第9森ビル)

電話/03-433-7461 代 振替東京 107534 ㊤ 105

印刷/新日本印刷(株)

〈検印省略〉

0093-0022-8942

落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

戸川猪佐武

第五部 保守新流

小説吉田学校



小說吉田学校

第五部
保守新流

目次

夏の嵐——田中角栄逮捕——7

執念の人々——大福提携なる——38

攻防の陣——三分の二の圧力——59

総理の賭け——挙党協の旗揚げ——74

八月二十四日——十五閣僚の謀議——97

午後の抗争——三大福会談——119

冷めた熱気——五役収拾に動く——155

対決の時間——大荒れの総務会——179

長老動く——保利・中曾根会談——196

決断のとき——主流派の強行突破作戦——216

閣議は荒れる——急転妥結へ——236

内閣改造——もめる幹事長人事——262

狂宴のあと——総選挙の敗北——284

交替の日——大福角連合す——298

装
幀
村
上
豊

夏の嵐

1

遠雷にも似た轟きを、三木武夫はその耳の奥底に聞いた。それはやがて沛然、轟然と到来する夏の嵐を前触れるような厳しい冷気を、和服を通して三木の肌に覚えさせた。

といつても三木は、山巒の陋屋にいるわけでは、もちろんなかった。永田町の首相公邸の自室に、身を置いている。

このとき——昭和五十一年七月二十六日の夜、東京の夜空を彩るものは満天の星であった。にもかかわらず、三木の心理と皮膚に、山雨まさに到ろうとするものを覚えさせたのは、

——明朝、前首相田中角栄逮捕。

それを通報する一本の電話であつた。稲葉修法相からのものである。稲葉は選挙区の村上市にいて、そこから電話で知らせてきたのだ。

「たった今、検事総長から電話で連絡を受けました。検察庁はいよいよ明朝、踏み込みます」

ロッキード事件で、高官が逮捕されるという意味であった。

踏み込む——という言い方は、いかにも大時代的であり、警察用語的であり過ぎた。そういう言葉を、こういう際、法務大臣の立場にある人間が、こともなげに口にするところに、稲葉という人間の飄逸さが見られた。とはいえ、そんな調子が、しばしば国会答弁のなかに現れるので、一部からは不謹慎という謗りを受けることにもなっていた。

三木は、つとめて冷静さを保ちながら、稲葉に尋ねた。

「いったい誰が……逮捕されるのかね」

「角さん……です」

三木は受話器を耳にあてたまま、しばらく言葉が出なかった。そして無言のまま電話を切った。

——やはり来るべきものが来た、ということか。

ロッキード事件が発火したのは、二月五日であった。米上院多国籍企業小委員会（チャーチ委員長）で、ロッキード社のコーチン副会長が、

「金は、政府高官に支払うため、丸紅の伊藤（宏専務）に渡されました」

と、証言したのが、その発端であった。

これを追うように、フランスの小さな新聞——奇妙なことに、アフリカ問題を専門とするその小さな新聞が「ロッキード社資料」に基づく情報と称して、

「この事件に関係している政府高官は、岸信介と田中角栄である」

と報じた。これが、マスコミに田中の名前が登場した最初のものであった。

その新聞を、パリの日本大使館が入手して、本省に送ってきた。その翻訳が、三木の手元にも届けられた。それ以来、三木は田中のうしろ側に、ある種の疑念のかげりを感じないわけにはいかなかった。

事件の炎が燃えさかるにつれて、三木は、自民党の危機をひしひしと感じた。記者会見や国会答弁の場で、三木は、

「ロッキード事件を、自分の手によって徹底的に解明する」

「再びこのような不祥事件を発生させないよう、自民党の改革、近代化を成し遂げる」

という答弁を、繰り返し続けた。

衆議院では予算委員会で、ロッキード事件の証人喚問が行われた。国民は、それを放映したテレビの前に釘づけにされた。

野党は、ロッキード事件究明以外には、ほとんど審議を拒否し、そのため五十一年度予算の成立は、大幅に遅れることになった。三木内閣は会期を延長し、予算案は成立させたものの、赤字国債を発行するための財政特例法案は、衆議院を通過しながら、参議院では継続審議ということで、成立せずに終わった。

この間、検察の捜査も進んで、丸紅関係では松山広前会長、大久保利春、伊藤宏両前専務、全

日空では若狹得治社長、渡辺尚次副社長、沢雄次専務、藤原亭一取締役、青木久頼経理部長、植木忠雄営業本部長などが逮捕され、いずれも起訴された。ロッキード社の影の顧問で、政財界のフィクサーと伝えられた児玉誉士夫の秘書太刀川恒夫が逮捕され、児玉自身も病床にあるままに捜査を受け、ともに起訴された。それでもまだ、それは政治家にまでは及ぶことなく、ほぼ六カ月間が経過した。

——政界では何人が逮捕されるのか？

——逮捕されるのは誰か？

という疑惑の濁流が、政界内に重苦しく渦巻き続けてきた。

それにしても第一弾の逮捕者が、総理大臣という最高の位にあった田中角栄になろうとは、三木も予測しないところであった。

2

逮捕令状を、東京目白台の自邸で、東京地検の松田検事から示されたとき——翌七月二十七日午前六時半、田中角栄は無言のまま領いて、着替えのため奥に入った。

——いずれこういう場面が、訪れるかも知れない。

そのことを、田中が予期していたもののように、検事たちには思えた。

事実、田中にはその覚悟があった。それは四月十三日、丸紅の松山会長が逮捕されたときから、田中の胸の奥底に萌し始めていた。だが田中は、その思いを一度も口にはしなかった。田中派・七日会の総会でも、

「私は、断じてそんなことはない。潔白だ」

と、言い切った。そう言いながら、田中は密かに自問自答していた。

——七日会の諸君の心情を思えば、そう言う以外に方法はないではないか。そう断言することが、自分としては当然なのだ。

——それに松山から自分のもとに運ばれた金は、果して収賄といえるものだったか？ 決してそうではない。まさしく選挙資金、政治資金以外の何ものでもなかった。事実、そのように使ったのだ……。

田中は、もし検察庁の取調べという場面に遭遇したならば、選挙・政治資金としての献金を受けた、ということを主張する肚を固めていた。

——とすれば、これは政治家として疚しいことではない。

この論理は、政党の金権的な体質を批判するマスコミには、とても許容されないものであったとしても、田中自身の政治観、ひいては人生観には合致するロジックであった。

——金の力……悪いことだと世間はいう。だが学歴もなく、また戦時中、地下足袋をはいて朝鮮に渡り、命を賭けて働いてきたおれが、政治家になり、政界で大を成すために、金の力を活かす

以外に、いったいどういう方法があったというのか。

——それが悪いというならば、良家、金持の子弟として生まれ、苦勞もなく大学を出たものが偉くなる。貧しい星の下に生をうけて、学歴も得られない人間は、世に出られないというのか。

田中は、胸の中で居直るのだった。

——どう言われようと、最悪の場面に立ち至ったとしても、おれは絶対に負けない……。

現実には、今、その最悪の場面が、田中に訪れたのである。

ネクタイをきちんと結び、いつもの紺の背広を着て、検事たち九人に取り巻かれた形で、田中が検察庁の車に乗り込んだのは、七時十二分であった。このとき田中郎には、張番の記者たちの姿はなかった。

「あるいは検察庁の玄関には、新聞社のカメラマンが待ち受けているかも知れません」
車が走り出したとき、松田検事が田中にそう言った。

「……結構だよ」

田中は、ぼっそりと答えた。

車が、霞が関にある検察庁の合同庁舎に向う十五分ほどの間に、田中の脳裏を去来したものは、炭鉱国管疑獄で逮捕されたときの場面であった。

吉田茂自由党内閣が衆議院を解散した日——昭和二十二年十二月二十三日、数字については卓

抜いた記憶力をもつ田中は、明確に覚えていたのだが、その日に田中は逮捕された。

この事件は、先の片山哲社会・民主・国協連立内閣が、連合軍総司令部の命令によって提出した炭鉱国家管理法案をめぐって起ったものであった。

吉田を総裁とする野党の自由党は、この法案に対して激しい反対を繰り広げた。与党の民主党のなかでも、元首相の幣原喜重郎たち二十数名のグループが、これに呼応して本会議の採決では、反対の青票を投じた。田中もそのなかの一人であった。

幣原、田中たちは民主党を脱党して、同志クラブをつくり、後に吉田自由党に合同した。これが縁で、田中は吉田学校の一員となっていくのだが、その彼が逮捕された容疑は、炭鉱国管法案に反対する炭鉱業者から、百万円の献金を受けたというものであった。

そのとき、若く勇ましかった田中は、検事の前でたんかを切った。

「解散の日に、おれを逮捕するとは選挙妨害だ。政治的陰謀ではないか」

田中はペンと紙を用意させた上で、このように怒鳴った。

「おれは検事総長を告発する！」

嵐の夏
そのときの田中逮捕は、社会党を支援する総司令部民政局が、反対党の自由党にダメージを与える狙いで、炭鉱国管問題を利用したきらいは確かにあった。田中は、後に無罪になっている。三十年近くも前の、そのときの幾つかの場面が、田中の脳裏を過ぎ去っていったが、それにオーバーラップして浮ぶものは、四十九年十一月二十六日の情景であった。いわゆる金脈政変で、

田中が総理大臣、自民党総裁を退陣したときである。

退陣声明は、内閣では竹下登官房長官が、彼に代って記者団に読み上げた。党では二階堂進幹事長が、議員総会の席上で、これを代読した。

それがテレビに中継され、ブラウン管に映し出されたのを、田中は首相官邸の首相執務室で数人の秘書官と見ながら、ぼろぼろと涙を落した。田中が泣いたのは、竹下が読む声明が半ば近くに達したときであった。

「……一人の人間として考えるとき、私は裸一貫で郷里をたつて以来、一日も休むことなく、ただ真面目に働きつづけてきた。顧みて、いささかの感慨がある……」

今、検事を前にして、田中は、

「済まないが、ペンと紙をくれないか……」

と言った。

検事は、どきりとした様子を見せた。田中を調べた検事も、そこにいた。かつての炭鉱国管事件のとき、紙と筆を要求した昔話とはにかく、奇妙なものを書かれては困ると、警戒したのだ。田中は苦笑した。

——あのときから三十年近くが経過している。今のおれには、あのときほどの勇ましさも街気もないよ……。

田中は、落ち着いた口調で、こう言った。

「党と七日会とに、脱党、脱会届を書きたいんだ」

田中は運ばれた用箋に、脱党届を幹事長の中曽根康弘に宛てて、脱会届を七日会会長の西村英一に宛ててしたためた。いささか以上の感慨があった。だが、うちがわには、

——負けてたまるか。かりにこの裁判が何年かかろうと、おれは無罪だ。必らずカムバックする日がくる。

烈々と闘志が滾っていて、そのあたりは二十数年前の彼と変わるところはなかった。

3

田中逮捕について、東京地検の高瀬検事正と豊島次席検事とが、合同庁舎二階の検事正室に記者たちを集め、正式に発表したのは十時近い時間であった。当の田中角栄はすでに、サイレンを鳴らすパトカーに誘導されながら、この庁舎を去って、小菅の東京拘置所に向ったあとであった。

記者会見の席で、高瀬の声は、さすがに緊張で震えがちであった。

「被疑事実……を、申し上げます」

高瀬は、用意したメモを読み始めた。